

団体名 八重瀬町立東風平中学校	連絡先 <u>TEL:098-998-2107</u> Eメール: <u>kjh-t@yaese-edu.jp</u>
------------------------	--

1 実践事項 (②)

タイトル：生徒の『自己肯定感』を育み、学力向上へつなげていく！
 ～生徒と先生が一体となり『学びに向かう』東風平中学校へ～

2 実践内容

- (1) 校内研修のテーマ「学びに向かう生徒の育成」、サブテーマ「学校教育活動全体において、生徒の自己肯定感を高める取り組みを通して」と設定して、下記の3本柱を重点的に取り組んでいる。【図1】
 - ①各教科で学びに向かう生徒の姿を共有し、その姿を目指して「問い」が生まれる授業実践。
 - ②生徒の学習改善につなげる指導と評価の一体化。
 - ③全教科での教科面談、放課後の「STEP UP TIME」を設定し生徒が学びに向かえるような個別指導の実施。
- (2) 全職員で一人1研究授業の実践と3回以上の授業参観を実施。各教科で指導案検討と授業研究会を実施して授業改善に取り組んでいる。また、授業で学びに向かっている生徒の様子や先生方の指導実践をまとめた校内研修だより「先生方のイイね」を発行し学校HPへ掲載している。生徒・先生・地域が一体となり、学びに向かう東風平中学校を目指している。【図2】
- (3) 道徳の授業で「教師ローテーション道徳」を行うことで、学年の全職員が全生徒と関わる機会となっており、全職員で道徳の指導実践に取り組んでいる。
- (4) 全国学力・学習状況調査や沖縄県生徒質問紙などから本校生徒の実態を把握し、成果と課題点、改善点を全職員で共有し、授業改善に取り組んでいる。【図3】
- (5) 昨年度から引き続き、生徒同士で共に学び合う「スタ場」を定期テスト前の放課後に実施している。自分の目標に向かって主体的に参加し、今年度は11回実施し、延べ660人以上が参加し、友達と学ぶことを通して、学力の定着を図っている。【図4】

3 説明資料 (写真、グラフ、図、表など)

【図1】研究のイメージ

【図2】校内研修だより「先生方のイイね」

いいな～ポイント② 新たな「問い」

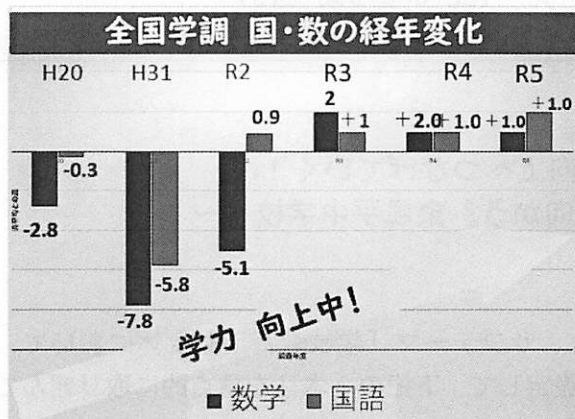
実践の場では「問全策or問全策」×「電解質or非電解質」の組み合わせで考察を行い、電流が流れるのは「問全策・電解質」の組み合わせと分かりました。その時に、生徒から「ショウショウしている！」「電流が流れている！」「理も出て」とグループで発表。ある生徒が「このまま電流はなくなるのかな？」、考察を通して今までの体験を振り返り、新たな「問い」が生まれていました。さらに、別の生徒は「イオンに電流があつて・・・」と新たな仮説を立てていました。考察を振り返らせた8組の様子に素晴らしいと感じました！

電流が発生したとき、亜鉛板がショウショウして、気体が発生したけど何？

【「問い」が生まれる授業サポートガイドP26 授業のポイントより】

- ④ 結論の導出
 - 子供の言葉をもとに結論をまとめる
 - 考察時に子供たちが言い足りない、詰まらして表出された言葉をもとに結論をまとめよう。結論は問題・課題に正対させ、整理しましょう。
- ⑤ 振り返り (新たな「問い」)
 - 自分の発言を自覚させ、新たな「問い」につなげる
 - 学びの過程や結果等を振り返ることで、学びの意義について自覚し、知識や技能の定着を図るとともに、学びの確立や応用問題への取組、次の学びへの新たな「問い」につながるよう指導を工夫しましょう。

【図3】 諸調査の分析から改善点を共有



【図4】 共に学び合う「スタ場」の様子

スタ場の様子

～学び合いで、自分の目標点に向かって頑張ろう!～



4 成果

- (1) 管理職の助言のもと、全校体制で「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」の具現と「問い」が生まれる授業を共通実践するなど組織的授業改善に取り組む事ができた。
- (2) 全国学力・学習状況調査より、国語と数学において3年連続で正答率が県平均を上回っている。
- (3) 第2回沖縄県生徒質問紙(11月)において、質問全15項目中14項目で沖縄県の平均を上回った。授業や学級、生徒会活動・部活動において、生徒の「よさ」を見つけ励まし、生徒の自己肯定感を高める実践を全職員で共通して取り組む事ができた。

5 課題

- (1) 第2回沖縄県生徒質問紙(11月)において、「これまでに受けた授業で、コンピュータなどのICT機器をどの程度利用しましたか」の項目で、県平均正答率より10%下回った。ICTを使う事が目的ではなく、今後は効果的な利用について学年や教科で検討して実施していく。
- (2) 自学自習に関しては、宿題としてやらされている感が否めない。今後は学校での学びを通して生徒が目的意識をもって様々な人と協働できるような「キャリア教育」の視点に重点を置いた取り組みが必要である。